

# 淡路島における土地の高度利用

(その発想と展開)

あわじ島農業協同組合企画監理部

部 長 古 東 英 男

## 1. 卒業論文

私は卒業論文に「我が村の土壌の状態と今後の対応」というテーマを選んだ。昭和32年の春であった。顧問の先生と相談をし、その手順と地元関係者（役場、農協）の協力を得られるか、走り回った。幸い役場の産業課長が協力的な人で予算までつけてくれた。一方、農協は組織を挙げて人的応援をしようと云ってくれた。

6月に土壌採取をし、7月から役場の一室を借りて分析にかかった。7月20日から始まり、お盆休みの3日間だけ休んだだけで、9月5日までの間に2,960点の分析を終えた。これだけの点数をこなすには、3人の助手をつけてくれたので出来たものだった。一方、10月に125ヶ所の検土壌を行い、土層別に10の区に分け、地図に色分けをして、土層の分布地図を作った。

これを120枚（A-4判）にまとめ上げたのが私の卒業論文であった。

この論文を書きあげたことによって、私の人生が変わった、ともいえる。

## 2. 現地確認試験

### 1) 初めての試験田

私の村は平均耕作面積60aの貧乏百姓の村だった。3年に1回くらい大雨が降り、収穫期のタマ

ネギを流してしまったり、腐らしてしまったりしていた。“早生のタマネギを作れば良いのに”とか、“松帆のような低湿地帯にはタマネギを作ること事態無理なのだ”といった批判がささやかれる土地であった。

農家の人たちは麦もタマネギも収穫出来ない年は、日銭かせぎに出るより仕方がなかった。

こんなとき、新しい時代の農業指導者（営農指導員）として、不安と期待の中へとび込んで行ったのだった。何かをしなければと思いながら良案など浮んで来ない。そんな毎日であった。

そんなある日、自分にはあの卒論があるではないか、あれを生かす方法はないものか、……そして土層区分をした10ヶ所で水稻の肥料比較試験をやってみようと思いついた。

1区石灰チッソ、2区硫安、3区高度化成（硫加磷安1号）4区低度化成（くみあい化成20号）5区尿素ダンゴ、6区無肥料を設け、道路添いの篤農家の圃場を借りて、大きな立札を建てて、通りすがりの人も良くわかるように試験田を作った。

収穫期には近所の人たちを現場に集め、その作柄の検討会を行った。又、その成績をまとめて、部落座談会で解説して回った。

## 本 号 の 内 容

|                       |   |
|-----------------------|---|
| § 淡路島における土地の高度利用…………… | 1 |
| (その発想と展開)             |   |

あわじ島農業協同組合企画監理部

部 長 古 東 英 男

|                          |   |
|--------------------------|---|
| § 寒地水稻に対する被覆肥料の肥効特性…………… | 5 |
|--------------------------|---|

北海道立中央農業試験場農業土木部

主任研究員 前 田 要

その結果、私は試験データより大きな収穫物を得た事に気づいた。それは農家の人たちには、農業技術というものを、見せて、体験させて、納得させる、ということであった。今一つは私の言うことを聞いてくれるようになったことである。

この試験が私と農家を結ぶ信頼の最初の1頁となるものであった。

## 2) 稲の短期栽培

次に私が手がけたのが、稲の短期栽培であった。この技術は私が試験場にいた昭和32、33年に菊地年夫技師の下で、早農林という品種を使って、播種から刈取までを100日で終えようと考えた方法である。

この技術は苗令や播種日によって大きく成績をくるわすが、うまく使いこなす“コツ”（6月1日播種、6月25日田植、9月5～10日刈取）を覚えれば、淡路島には受け入れられる条件が揃っていた。

その条件とは①水の少ない淡路島では、その使用量が2割少なく出来る。②9月上旬に刈取り出来ることにより、タマネギの苗床（9月中、下旬播種）に出来る。③早期栽培（保温苗代をし、5月に田植……9月中旬刈取り）のように5月に田植えをしなくて良い。（タマネギの収穫が6月上旬のため、となりの田に水を入れられると、水もれや、降雨が重なると田んぼがぬかるんで、作業がしにくくなったりして、人間関係がまずくなる。）

かくて、短期栽培が普及してくると、タマネギ苗床以外に、9月下旬に定植するキャベツやハクサイが栽培出来るようになってきた。

## 3) 試験成績発表会

稲の刈取期に併せて、秋冬野菜を作る農家が増えて来ると、次は、どのような品種が良いのか、又肥料や薬剤はどのようなものが良いのか、そして、作型や体系試験に取り組むようになった。

これらの試験はただ効果を確認するだけでなく、どうすれば金もうけが多く出来るか、を常に考えた方向で取り組んで来た。

これらの試験は試験場や大学の研究室の試験ではなく、農家が、すぐにでも取り組める技術の開発であり、その土地に生れ育った篤農家といわれ

## 営農振興計画書 地域農業の指導書



る人たちと、営農指導員とが一緒になっての試験研究であった。尚、これらの試験を試験だけに終らすのではなく、成績をまとめ発表会を開いた。この発表会のため営農指導員は、十分な研究と説明が出来る能力を身体で会得して行った。この身体で覚えた貯えがやがて三毛作技術体系や、複雑な「地域複合営農」を推進出来るエネルギーになったのである。

かつて、農水省から出向で2年間、洲本市役所の農林水産課長として来られていた川崎厚夫氏は、「東京で淡路島の三毛作農業という言葉は何度か耳にした。私は、その実態を見とどけてやろうと思って、この淡路島に来た。やっとその正体を見つけることが出来た。その最初の一滴が、この研究発表会であり、ここから流れ出していることがわかった。その内容の充実さと、豊富さは目を見はるものがあり、全国に他に例を見ないものであろう」といっておられた。

尚この研究発表会は昭和45年11月に第1回が開かれ平成4年10月まで、毎年春3月と秋10月の年

## 営農研究会 集落ごとの研究会

